

幕末民衆の恐怖と妄想

—駿河国大宮町のコレラ騒動—

高橋 敏

Fear and Delusion in Bakumatsu Japan: The Cholera Disturbance in Omiyacho, Suruga Province

はじめに

- ① 世直しの予兆
- ② 大宮町のコレラ
- ③ 死の恐怖と妄想
- ④ コレラの除災儀礼——くだ狐に三峯山の御犬
- ⑤ 民衆の宗教構造
おわりに

[論文構成]

生命の危機にあらされたとき人々はどのようにこれに立ち向かうのか。日本歴史上人々は天変地異の大災害や即死病といわれる伝染病の大流行に直面した。文明の進歩、医学の革新等、人々の生命に関する恐怖感は遠のいたと一見思われがちの現代であるが、二〇〇三年のSARSの大騒動は未だ伝染病の脅威が身近に存在することを思い知らしめてくれた。

本稿は安政五年（一八五八年）突如大流行したコレラによって引き起こされた危機的状況、パニック状態を刻明に実証しようとしたものである。人々は即死病といつて恐られたコレラが襲って来る危機的状況のなかでどのようにこれに対処したのか、本稿は駿河国富士郡大宮町（現富士宮市）を具体例として取り上げる。偶々大宮町の一人が克明に記録した袖日記を解説することから始める。

長崎寄港の米船乗組員から上陸したコレラ菌は東へ東へ移動し次々と不可思議な病

いを伝染させ、未曾有の多量死を現実のものとした。コレラに対するさまざまなか医療行為が試みられるが、一方で多種多様、多彩な情報を生み出し、妄想をまき散らしていく。まさに、現実の秩序がくつがえる如く、人々を安心立命させていた精神（心）の枠組が崩壊し、人々はありあらゆる驚き鎮魂の呪術を動員し救いを求めていく。

コレラ伝染の時間的経過と空間的ひろがりに対応して人々の動きは活発化、非日常の異常に自らを置く方策を躊躇していく。

コレラの根源を旧来の迷信の狐の仕業、くだ狐と見なしして狐を払うため山犬、狼を設定し、三峯山の御犬を借りようとする動きやこの地域に特に根強い影響力を有する日蓮宗の七面山信仰がコレラを抑える能力をもつとして登場する。

極限状況の人々の動向にこそ時代と社会の精神構造があらわにされるのである。